

ミラノ・バーゲンの主役は中国人、ロシア人（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2011/7/12 7:01 | 日本経済新聞 電子版

旧知の方々と、年に1度の集まりがあって、大酒を飲む。年に1度というのも、年を取ると、すぐに巡ってくる。「チェリー」などという強くて古くさい銘柄の煙草（たばこ）を離さなかった友人まで、煙草をやめて、煙がもうもうと立ちこめていたこの会も、私以外は、誰も吸わなくなった。健康に気を留めて、煙草をやめるなどという発想があるとも思えなかった友人たちも、次々と喫煙家という誇らしい称号を返上してしまった。寂しい限りである。

「現役を退いて、ストレスがなくなったので、せめて、タバコをやめるストレスを感じたくなったのではない。わが社も禁煙になってから、技術開発のスピードが落ちた気がする。パソコンの画面を布でふくと、ニコチンで布が茶色っぽくなった時代は、もっと、面白い技術が出ていた気がする。煙草でも吸わないと、頭が痛くなるほどのストレスというか、プレッシャーがあって、煙草で一息ついて次に進むといった緊張がなくなったのではないかと。それではダメだと思うけど。私は地球上で最後まで煙草を吸っていたと言われるまで吸い続けることにした」

煙草と開発効率を結びつけることは、土台おかしい話で、禁煙至上主義に対する単なる八つ当たりのような無意味な話をするのだが、バカバカしい冗談には、だれものつてくれない。いまさら、禁煙など話題としても古すぎるのだろう。

「そういえば、菅総理って、煙草はすわないのかな」

「そりゃ、煙草なんていないよ。あの人は」

会話が弾んで、時計を見ると、予定の時間をはるかに過ぎてしまい、あたふたと深夜の羽田空港に駆けつける。

羽田発0時35分、早朝のパリで乗り継ぎ、イタリアのボローニア空港に着いたのは、15時間後。ボローニアからブドウ畑が広がる単調な眺めをみながら、車で1時間ほど、目的地のラヴェンナに着く。毎年、夏の陽光が燦々（さんさん）と降り注ぐ世界遺産となっている旧い町のラヴェンナに来る。親交のあるリッカルド・ムーティ氏の奥様であるクリスティーナさんが主催しているラヴェンナの音楽祭を訪ねるためである。ラヴェンナは、観光地にもかかわらず、ひっそりとした静かな街だが、かつては法王庁が所在していたり、ダンテの墓やモザイクをはじめとしたイスラム文化の造形が残っていたり、歴史的にも、重要だった地である。真っ青な空、燦々と降り注ぐ輝かしい陽の光は、例年と変わらないが、今年は湿度が少なく過ごしやすい。明るすぎる光だけが覆っている昔ながらの町の昼時、物音ひとつしない、静寂そのもののちいさなホテルにいと、違った時間が流れて、分刻みで過ごす日々の忙殺が、他人事のようである。

あわただしい日々を過ごし続けている私は、毎年、ラヴェンナには1泊2日が精々で、翌朝には、ラヴェンナからニューヨーク、あるいはシンガポールと、いつもながら、もったいない旅をしている。今年も1泊し、わずかなりの散策、コンサートに行き、会食をして、すぐにミラノ、ロンドンに行くのである。ヴェネチアが近くにあるのに、寄ったこともないのだから、貧乏性といえば、本当に貧乏性である。

厳しい財政状況のイタリアでは、文化予算の削減が断行されて、国の援助で辛うじて活動を続けている13の国立歌劇場が、存続の危機にあるという。音楽関係者は一様にベルルスコーニ政権の文化予算に対するカットを非難しているが、厳しい財政事情の下、オペラの歴史を担った国ですら、膨大な経費のかかる歌劇場を13も国立劇場として維持運営していくのは困難なことに違いない。

音楽、特に巨額の費用が掛かるオペラハウスの将来は、どこの国でも頭を悩ます話である。ミラノのスカラ、パリのオペラ座、ウィーン等、グローバルな存在のオペラハウスはともかく、地方で営々とオペラを上演し続ける劇場は、どこも大変である。ワーグナーの象徴でもあるバイロイト歌劇場にしても、一部の新演出の公演については、ゲバントハウス歌劇場とのジョ



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。



音楽祭のため訪れたラヴェンナで(筆者撮影)

イント・プロダクションによって、経費の負担を分散させるといった動きが報じられている。聖地バイロイトだからこその公演ではなくて、ゲバントハウス歌劇場と同じなら、わざわざバイロイトまで行かなくてもよくなってしまってもいいけれど、音楽ファンとしては寂しい話である。オペラについては、今や骨董（こつとう）品だという批判もあるけれど、歌舞伎がいまだに、その価値を持つ以上に、イタリアが生んだオペラという芸術は、世界の人々を素朴な感動に誘う力を持つ豊かな芸術である。欧州経済の危機の根が深いことは間違いないが、それにしても、なんとかやりくりして、文化に対する予算の削除は、最小限にとどめてほしいものである。

「ラヴェンナ音楽祭」は、その日がフィナーレ。ケニアのナイロビとの信頼を謳（うた）ったもので、4500人もの聴衆が集まって、ムーティさんの指揮による、ベルリーニやベルディのオペラからの名曲コンサートである。合間に、ナイロビの人たちの踊りや太鼓が披露されていた。ナイロビは治安が悪く、ストリートボーイが溢れるなど、貧しさというアフリカの抱える典型的な問題を抱える都市である。

初めて聴くケニアの国歌は、サバンナの夜明けを思い起こすような曲調で、途中からロシア音楽の憂いがひろがるようなもので、国歌としては不思議な感じのものだった。有名なイタリア国歌は、コーラスと一体となって勢いよく響くと、やっぱり、政治活動が国の未来に熱い思いでつながっていたあのガリバルディの時代の躍動が伝わってくる。続いて演奏されたベルディの「ナブッコ」をはじめとする初期の作品には、国に対する思いの熱さが伝わってきて、政治が人を燃え立たせた時代のドラマに思いが及んでしまう。

「何回となく、あれだけの天災に立ち向かい、必ず復活を繰り返す日本っていうのは、本当に凄（すご）い。素晴らしい民族だと思う。もう既に、凄い速さで復興が始まっているのですよね」

音楽祭の関係者の方々と食事をしていたら、一様に、困難に立ち向かい、それを克服する日本について、尊敬と感嘆の思いを語ってくれる。「それに比べて、ベルルスコーニのイタリアは、政権も変わらず、何も変わらない。政治に対する諦めは、若い人たちばかりではなく国民全体の無気力につながっていく。本当になんとかしないと」という。「諦めが、無気力につながる」という言葉は、どうあろうと、辞めようとしないう菅政権、遅々として進まぬ復興の進ちょくの姿が重なってしまい。「日本の政治もひどいものですよ」と、つつい言葉を引き継いでしまった。

イタリア国歌や、ベルディの音楽から想起される国というものに対する熱い思いやドラマのもつ感動をずたずたに引き裂いたのは、まさに20世紀である。ドラマがなくなったわけではないのだが、それは、まさに惨たんたる地獄絵図のようなものになったのである。第1次世界大戦の無意味で悲劇的な戦争に始まって、ヒトラー、1千万人単位での虐殺や過酷な死をもたらしたレーニンやスターリン、毛沢東の革命。そこにドラマがないとは言えないし、レーニンなど、まさに宗教的なドラマをもちこんだからこそ、ロシアも変わったのだともいえるけれど。

「ポリシェヴィキには劇場に対する鋭い感覚が備わっていた。自分達のイデオロギーを新たな＜宗教＞というかたちに作り変えなければ、ロシアには受け入れられない。レーニンの早期の死は、その意味では彼らの望みだった」

高速鉄道を利用して、ミラノに着く。7月のバーゲンシーズンとあって、ミラノのファッション街は、人が溢れ返っている。今年は、中国とロシアの金持ちが圧倒的に多い。なかでも中国の人たちが、圧倒的な数だという。ブランド名がついた大きな紙袋をいくつも抱えていたのは、かつては日本人だったような気がする。スターリンのロシア、毛沢東の中国、あの途方もない虐殺を伴った悲劇的な時代をへて、今、高級なイタリア・ファッションを買いに集まるロシアと中国の富裕層をみると、歴史は残酷でなおかつ喜劇的でもあると思わざるを得ない。

鈴木幸一III社長のブログは毎週火曜日に掲載します。

読者からのコメント

60歳代男性

最近、フランスへ観光に行きました。まだ、案内板は日本語が多いのですが、観光客は断然中国人の比率が多い様でした。ルールで、彫刻に片手を触れて、代わる代わる記念写真を撮っている中国のおばさん達に、つい声を荒げて注意してしまいました。

団塊の凡人さん、60歳代男性

ブログ部分について語るのは気が引けるのですが、タバコの時代について一言。私も鈴木社長と同年代の喫煙者ですが、確かに、学生時代以後、タバコの煙がもうもうとする中で、放歌高吟・談論風発…この国のエネルギーが高揚していた時代を懐かしく思

います。ヒステリックに禁煙を叫び健康第一に汲々としているような今の世相を異常とせず、それが当たり前という社会になっています。過去20年余り、日本の首相が小物になり、若者も内向きになり…、この国の活力減退とタバコとの相関関係はともかく、寂しい国になったものです。

40歳代男性

最近は何の国に行っても中国からの団体旅行客の多さに驚かされます。またインドの団体旅行客も結構見かけるようになりました。世界が否応なしに中国とインドと向き合わないといけない時代。アメリカ合衆国の中国系市民も380万人を超え、全人口1.3%程度に達しまだまだ急増しているとか。2050年には全米の1割近くがアジア系になるといわれている。日本の企業がこれからどこまで国際環境の変化に追従できるかが企業存続の鍵なのでしょう。

月太陽さん、30歳代男性

自動車業界ですが、工場/開発現場、どこへ行ってもアジア人と言えばインドと中国の方々ばかりです。こないだ行った工場は英独印中のトランスレーションシートは有りましたが勿論日本語は有りませんでした。少しマイナーな観光地（海外）へ行くとまず中国人？と聞かれます。日本の存在感は急速に減少していると感じます。加えて政治。弊社内では開発キーパーソンの外国人が「日本の政府が信用出来ないの、危険かどうか判断できない」と言って日本に来るのを拒んだため、開発が遅れています。影響を身近に感じています。

鈴木幸一 IJJ社長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

[経営者ブログ トップ](#)

[ビジネスリーダー トップに戻る](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.